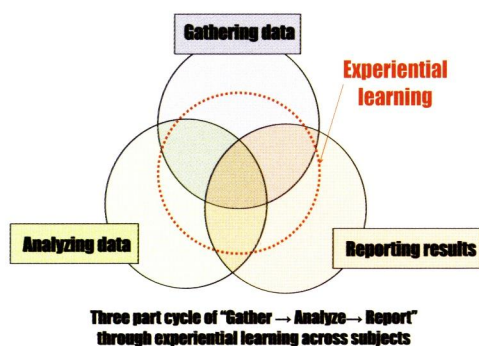


questioning), and, finally, presenting it in some form. Projects may result in oral reports, poster presentations, PowerPoint talks, dramatized dialogues, podcasts or short films, the publication of brochures, compilations of writings, or essays, or even a class book or multi-media production. At the end of each semester, students will compile their best work into a Final Portfolio, write a reflective comment on the work, and submit it for consideration.

Rhetorical patterns will be interwoven into the language practice at all levels: in IS1, for example, the focus is on Illustration. Students will learn to gather specific details and examples to support and illustrate main ideas. In IS2, the rhetorical focus is Comparison/ Contrast. Using rhetorical organization in speaking and listening practice as well as in more traditional reading and writing activities, the IS program aims to give students more complete mastery of the four rhetorical patterns that are common to all OJC academic classes: Illustration, Compare and Contrast, Cause and Effect, and Persuasion.

Interest and anticipation are high for the new program as the new academic year approaches.



Project 3 外国人児童生徒のための言語教育モデルの研究

報告者 加藤 映子

本プロジェクトは、秋学期に学習会を2回実施しました。いずれも本学に在籍しているバイリンガルの言語環境で育った3年生の学生4名に協力してもらいました。

第一回目の学習会では、朝鮮学校でコリアンを学習言語として教育を受けた 배정엽 裴丁葉 (ペ・チョンヨブ) さん, 허영리 許英里 (ホ・ヨンリ) さん, 김금향 金琴香 (キム・クンヒャン) さんにそれぞれの言語環境と言語教育について語っていただきました。この3人に共通している言語環境は、家庭では日本語でコリアンの単語が使われることが多いということです。「オモニあるいはオンマ (いずれも母を意味する)」を使っているのかと質問すると、「我が家では『パパ、ママ』です。」という返答には笑いが起こりました。幼稚園から朝鮮学校に通っていたという裴丁葉さんは、小学1年生から入学した許英里さんのコリアンの習得について次のように語っ

てくれました。「幼稚園から通っている私の方が、知っている単語や話せる事柄もたくさんありました。しかし、2、3年すると、だんだんと差がなくなり勉強がよくできるヨンリとなっていました。」この見解はバイリンガル教育の中でもよく指摘される事例です。後からスタートした学習者の言語能力が、2、3年で追いついてくるということです。また、今回話を聞いた朝鮮学校出身の学生の事例から明らかになったことは、ウリマル (私たちのことば) に対する民族のパワーです。高校から朝鮮学校に入学をした金琴香さんは、「入学をしてからハングルを学び、皆に助けってもらった。校長先生が個別指導をしてくれた」と話していました。ペ・チョンヨブさんも、「高校から入ってきたクンヒャンを助けよう」という気持ちで皆が応援していました」と語っていました。

第2回目の学習会に協力してくれたのは、母語の中国語を維持した上で日本語を習得した大野緑さんです。5歳の時に中国から帰国した大野さんは、家庭では中国語、学校では日本語を話す言語環境で育ちました。5歳で入園した保育園では全く日本語が理解できなかったのですが、半年ほどすると「私、日本語がわかる」となっていました。この事例もバイリンガル教育で指摘される事例です。幼少期の言語自体が遊びを中心としたことばであり、話される内容がそれ程複雑ではないことが言語の理解を容易にするからです。加えて、この保育園でずっと付き添ってくれた先生の温かさを大野さんは今でも覚えており、その先生のおかげで日本の生活に慣れていくことができたと言っています。小学校では日本語での授業に問題はなかったが、中国語を母語とする子ども達の支援教室に参加していた。その支援教室で中国からの留学生の大学院生にピンイン (中国語のふりがな) を学び、中国語も読めるようになったということです。第2言語を学び始める時期、受け入れる側の環境や姿勢が、学習者に大きな影響を与えることを大野さんの事例は示しています。ちなみに、大野さんと話をしていると日本語が第2言語であることは全くわかりません。また、大野さんは自分の出身の小学校で自分の経験を話すボランティアもしています。

今回家庭での言語環境や受けた教育について、私たちにシェアしてくれた上記の学生の皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。

国際共生研究所シンポジウム予告

公平で平和な世界へ —国際共生の意義と役割—

2011年10月

公平で平和な世界を構築するために、「国際共生」はどのような意義をもち得るのか、またどのような役割を果たし得るのかを、みんなで議論し、国際共生研究所の今後の進むべき方向を考えるシンポジウムの開催を予定しています。

国際共生研究所 HP にて、詳細をお知らせします。

<http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/RIICC>